

| 序文

「メディウム」という語にはあっさりで見切りをつけられる。批評上の数々の有害廃棄物と同じようにこの語を土に埋め、この語から離れ、自由な語彙の世界に入って行ける。当初私はそう考えていた。「メディウム」はあまりにも酷く汚染され、あまりにもイデオロギー的に、あまりにも教条主義的に、あまりにも多くの言説上の意味を詰め込まれたもののように思えたのだ。

スタンリー・カヴェルが用いる「オートマティズム」を使えないかとも考えた。彼は映画を（比較的）新しいメディウムとして取り上げつつ、自分自身にとってモダニズム絵画についてまだ解明されていないと思われた事象を焦点化する、という二重の問題に取り組む際にこの語を転用したのだった。^{*01} 彼にとって

「オートマティズム」という語は、映画の構成要素——
カメラの仕組みに依存する部分——が自動だ、とい
オートマティック
う意味を捉えたものだった。またこの語は、無意識の
反射としての「オートマティズム」というシュルレア
リスム的な使用方法にも接続されている（これから見るよ
うに、これは危険だが有用な示唆である）。そしてこの語は、
出来上がった作品が作者から自由だという意味での
オートノミー
「自律性」を仄めかす可能性も含んでいるのだった。

芸術についてのより伝統的な文脈で使われるメディ
ウムやジャンルといった概念がそうであるように、
オートマティズムという概念も、もともとは技術的
(ないし物質的) 支持体と諸々の約束事——コンヴェンション
それぞれの
ジャンルがその支持体の上で作動したり何かを表現し
たり機能するためにこれらの約束事が必要となる——
との関係を含むものだった。ところが「オートマティ
ズム」とわざわざ言う場合には、この語は「メディウ
ム」についてのこの伝統的な定義の前に、即興——偶
然に賭けることの必要性——の概念を掬い込むものと

なり、そうすると個々のメディウムは芸術的伝統の保証から切り離される。こうした即興的なものの意味こそが、「精神のオートマティズム」という〔シュルレアリスム的な〕連想を呼び込むのである。とはいえ、あるジャンルの技術的な基盤とその所与の約束事との関係が解放のスペースを開いてきたように——たとえば、声同士の複雑な結婚を即興でつくることを可能にしているのは、フーガの様式である——、ここでいう自動的な反射は無意識のそれではなく、むしろ即興がつねに保持している表現上の自由のようなものである。いま問題にしている諸々の約束事が、フーガやソネットのそれのように厳格である必要はない。それらは非常に緩かったり大まかなものであったりすることもある。しかし、それらがなければ即興の成否は判断できないだろう。つまり、表現性に目的がなくなってしまうということだ。⁰² 私にとってカヴェルの提示する例が魅力的に映ったのは、既存のいかなるメディウムにもすでに複数性が内在しているので美術のメディウムをまっ

さらなひとつの物質的支持体にすぎないものと見做すことは不可能だ、と主張していたからだ。還元主義的性質と物象化へと邁進する傾向のすべてによってメディアウムを単なる物質的対象と見做そうとするこうした定義が、美術業界の共通貨幣になっていたこと。そしてこの定義が「クレメント・グリーンバーグ」という名前と紐づいていたために、60年代以降は「メディアウム」という語を発すると「グリーンバーグ」を喚起するようになっていたこと。これが、私の直面していた問題¹⁰³だった。実際、「メディアウム」を「グリーンバーグ化する」こうした傾向にあまりに強い普及力があつたために、歴史的に先行する「メディアウム」についてのさまざまな解釈は、当時すでにその複雑性を取り除かれていた。たとえばモーリス・ドニが1890年に記した「絵画は、軍馬や裸婦や何らかの逸話である前に、本質的には、ある一定の秩序にもとづいて集められた色彩に覆われた平らな表面である、ということを思い起こすべきである」という有名な格言は、絵画が「平

面性」へと本質主義的に還元されていくことになる単なる前兆として、当時読まれていた。ドニの発言の要点はそこではなく、彼はむしろ再帰的構造と言っているような重層的で複雑な関係性——構造内にある諸要素が生み出すルールによってその構造自体が生成される、といった構造——について述べているのだが、そのことは完全に……無視されていた（し、いまでも無視されている）。しかも、この再帰的構造は所与のものではなく作り出されるものである。そのことは、たとえばかつて美術アカデミーにおいて教育のために諸芸術がそれぞれに異なるメディアム——絵画、彫刻、建築——で表現を行うアトリエに振り分けられたように、「メディアム」と技術の問題との伝統的な結びつきのなかにすでに潜在している⁰⁴。

最終的に私が「メディアム」という語を使いつづけることにしたのは、これに付きまとっているすべての誤解や誤用にもかかわらず、この語が私の取り組みたいと考える言説の領域に開かれているからだ。歴史

的なレベルにおいて、この概念の不幸な経緯は、年代的には批評的ポストモダニズム（制度批判、サイトスペシフィシティ）——これはこれで、問題の多い波紋を広げたのだった（インスタレーションアートの世界的な流行現象）——の台頭と重なっている。つまり、「メディウム」だけがこうした事態の変化に晒されてきたように思うのだ。また語彙のレベルにおいても、「固有性」の問題を引き寄せられるのは「オートマティズム」やその他の何かではなく、「メディウム」という語でしかありえない——「メディウム・スペシフィシティ」という名称のように。「メディウム・スペシフィシティ」もまた、不運にも不当な意味を込められた概念ではある——メディウムがあからさまな物質的性質のみに還元されたということになったために、この概念は、具象化ないし物象化の一形式として、誤ったかたちで書き換えられたのだ。しかしそれでもこれは（その本来の意味においては）、メディウム内部で重層化された諸々の約束事がどのように機能するかを論じるすべての議

論の本質を指し示す概念である。というのも、再帰的構造の性質とは、少なくとも部分的には、構造が構造自体を固有化できるということにほかならないからだ。

そういうわけで、以下につづく考察において、私は「メディウム」という語に固執することで読者にも同じようにこれを押し付けることになるだろう。しかし、序文のかたちをとっているこの覚書によって、「形式主義」^{フォーマリズム}をめぐる最近の論争とは無関係に長い歴史を持つこの語自体と、こうした論争が生み出したこの語の腐敗と価値下落についての思い込みとを、私が分けて使っていることが伝われば幸いである。